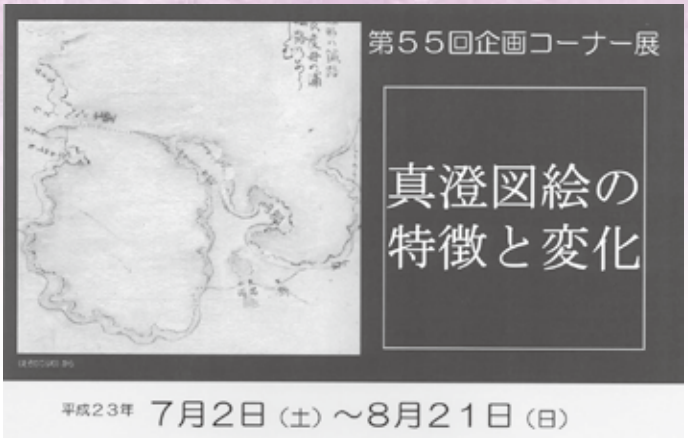
秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄

MASUMI

No. 29

「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。



菅江真澄の魅力の一つに、著作に添えられた図絵があります。土地のようすや事物を写実的に描いた図絵からは、人びとの暮らしにつながる多くのことを読み取ることができるため、特に秋田県民にとっては、江戸時代後期の郷土を知るための材料を提供してくれる、大きな財産になっています。

真澄が描く図絵は、旅のはじめから完成されたものではなく、蝦夷島（北海道）の旅を境に大きく変化しています。

展示では、真澄が描く図絵の変化が、松前における加藤肩吾との交流によるものであろうとする内田武志の論に拠って紹介するとともに、真澄の著作に添えられた約二四〇〇図にも上る図絵から、さまざまな描画手法とその特徴について紹介しました。

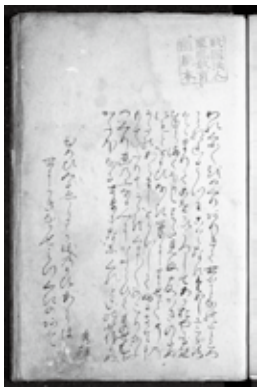
1 図絵を描く目的

菅江真澄が図絵を描く目的は、《粉本稿》序文にある文言をそのまま受け入れると、見知らぬ土地、珍しいモノ、珍しい習わしを描いて、故郷に帰ってそれを出版しようとしたことになります。

真澄の着眼点は「世にこと（異・殊）なれる」（《粉本稿》序文の文言）点にあり、ものごとを比較して見る真澄の眼が、図絵に活かされたことになります。それはまさしく、旅人である真澄が持つ特徴だったと言えます。

真澄が生きた時代、人にものごとを分かりやすく伝えるには、図絵を描くことが最も有効な手段だったことでしょう。真澄が描いた図絵とその技能は、日記の記述を具体的で分かりやすいものにし、旅の経験を人に話して聞かせるにも役立ったことでしょう。それは旅を支える手段の一つになったと言えます。

後年、真澄が種類毎にまとめることになった「図絵集」は、対象物を区別して描く描写力の表れとなりました。また、秋田藩領の「地誌」は、多くの図絵を伴っていたからこそ、他の地誌には見られない独特なものになりました。このように、真澄の著作を語るには、図絵は切り離せないものとなっています。


《粉本稿》序文
大館市立中央図書館蔵

2 図絵の変化

3 変化の要因

菅江真澄が描く図絵は、蝦夷島（北海道）の旅を境にして、描法、緻密さ、日記に差し挟まれる数まで、大きく変化しています。

真澄研究の内田武志は、『菅江真澄全集』別巻一で、松前藩の藩医であった加藤肩吾との交流が、図絵の変化に大きく影響したと推測しています。

理由としては、大きく二つのことが示されています。

一つは、日記に図絵を差し挟むようになった理由を、「愛瀰詩歌合」序文（《風の落葉六》収載）に読み取ることができることを挙げています。それまでは、日記に図絵を挟むことをせずに、日記とは別の画帳に図絵を描いていたとしています。

もう一つは、加藤肩吾が、松前藩応接使の一員としてラクスマンらとの交渉の中で見せた、地図への高い関心を挙げています。加藤肩吾との交流を通して、真澄自身の地図への関心が喚起され、鳥瞰図や遠近法の会得へとつながったとしています。

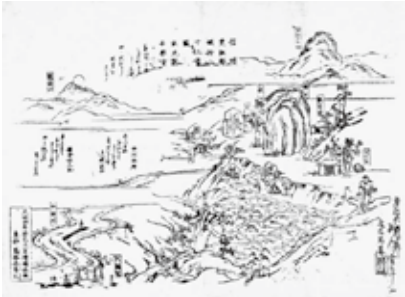
真澄の鳥瞰図的な描法の会得は、内田武志が『菅江真澄全集』別巻一に示した加藤肩吾との交流のほか、文化文政期から出版が盛んになっていく各地の名所図会、それに寺社境内図からの影響も考えることができます。

真澄による蝦夷島の旅以前でいうと、《かすむ駒形》（天明六年〈一七八六〉）に見える『都名所図会』（安永九年〈一七八〇〉刊）太秦広隆寺の牛祭に関する記述、それに、《わがこころ》（天明三年〈一七八三〉）の図絵に見える「更級郡姨捨山十三景図」との類似性を指摘することができます。

真澄は、旅の中で目にした名所図会や寺社境内図、それに地図や絵図などの描法や特徴を参考にするなどしながら、次第に真澄らしい描法を体得していったものと考えます。

『都名所図会』太秦広隆寺の牛祭
京都叢書版より

《わがこころ》姨捨山
（天明３年〈1783〉）
館蔵写本



更級郡姨捨山十三景図
資料は天保 14 年 (1843) の「増補再版」だが、《わがこころ》との類似性が認められる。

4 著作種別ごとの図絵の特徴

第56回企画コーナー展

真澄、県北の旅
～真栖のころ～

平成23年10月22日（土）～12月4日（日）

菅江真澄は、秋田を再訪した享和元年（一八〇一）から文化四年（一八〇七）頃まで、主に現在の秋田県北部（県北）を巡っています。

真澄は、一時期「白井真栖」の名乗を使っていたことがあり、それが文化二年（一八〇五）と文化三年であったと考えられます。その後、白井真澄へと文字遣いを改め、さらに文化七年（一八一〇）初め頃から「菅江真澄」へと名乗を変えています。

展示では、真澄が「白井真栖」を名乗った頃の日記について、その足跡と概要、そして特徴的な記事について紹介しました。そのため、副題を「真栖のころ」としました。

1. 県北部に関わる真澄の日記

《雪の道奥雪の出羽路》

●享和元年（一八〇一）十一月～十二月末。深浦（青森県）を旅立った真澄が、十七年ぶりに秋田に入ってきた時の日記。ハタハタや年市の様子など、特徴的な図絵がある。

《しげき山本》

●享和二年三月～六月。真澄は二度、合わせて一ヶ月余りも藤琴川上流の太良鉱山（藤里町）に滞在し、付近の山々を巡っている。

《雪の秋田根》

●享和二年十月～十二月末。森吉山に登った後、麓にある白糸の滝を見るなどして大滝温泉（大館市）に至った。図絵が四十二図と多く、雪中の図絵に特徴がある。

《すすきの出湯》

●享和三年一月～五月末の六ヶ月間（閏一月を含む）の日記。大滝温泉を本拠にして、十二所（大館市）との行き来を何度かする。五月には大葛鉱山（大館市比内町）に出かけている。

《にえのしがらみ》

●享和三年六月の日記。書名は、藤原泰衡の終焉地にまつわる伝承に基づく。発掘された土器や古鈴など、考古に関わる記録に特徴がある。

《みかべのよろひ》

●文化二年（一八〇五）七月～九月（閏八月含む）の日記。

《かすむ月星》

●文化三年二月～三月の一ヶ月程の日記。

《浦の笛滝》

●文化元年の一編と同三年（一八〇六）の二編の三部から成る。第一部は北秋田市川井で迎えた正月行事の記録。第二部は能代市滞在中の付近の見聞、第三部は笛滝（八峰町）に行くまでの記録となっている。

《おがらの滝》

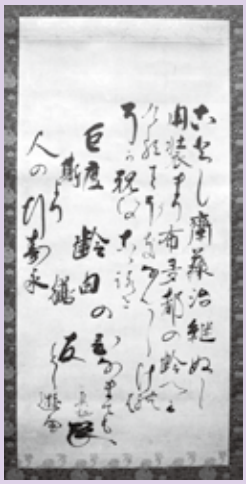
●文化四年（一八〇七）三月～五月。岩館（八峰町）から能代を通り、雪沢（大館市）に至るまでの見聞を記している。中国南方に漂流したという吉太郎漂流譚を書き留めている。

《錦木》

●文化四年五月末と七月初めの断片的な記述。全五十九丁のうち冒頭の四分の一が、盛岡藩領鹿角郡毛馬内付近を巡った日記と、錦木塚に関する他者の詩歌六編と図絵。他の大部分は、主に津軽地方の図絵である。

《十曲湖》

●文化四年八月～九月。毛馬内（鹿角市）を起点にして、紅葉に彩られた十和田湖と周辺にある滝を見物に行った。全体の約半分にあたる図絵が鮮やかである。

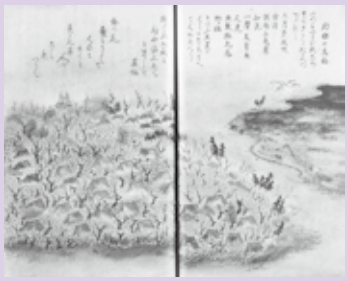


軸装　斎藤治継四十二歳の祝ひ
（北秋田市・吉田マツヱ氏蔵）

軸装　清応院領眼の夢（三種町・小笠原進氏蔵）

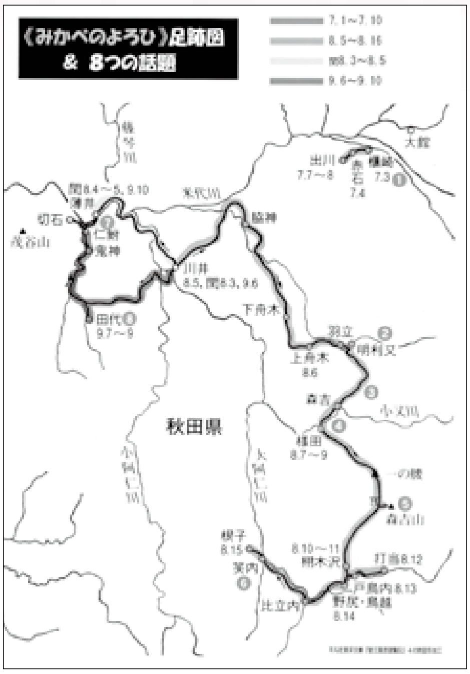
2. 「真栖」のころ

《みかべのよろひ》
館蔵写本



《かすむ月星》　館蔵写本

3.《みかべのよろひ》足跡図と八つの話題



① 子どもの病気をまじなうイタコ

「イタコが〈真草刈る野辺のはらはやみち遠くすむ山里に帰り行らん〉との御製を書いてちえると、親は子どもの髻（もとどり）に結んだ。すると、子どもの病気が治った」

※1「草を刈る野辺の童（わらは＝子ども）が、道の遠い自分が住む山里に帰って行くのだろう」の歌に、「わらはやみ」が隠されている。

※2 御製は天皇の歌のこと。ただし、「真草刈る〜」を御製とするのは伝承である。

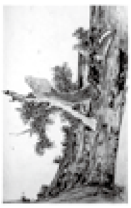
② 中世領主・浅利一族の墓碑（？）を見る

真澄は、浅利一族の墓碑として伝わっていた13基の碑を見た。しかし、真澄にはようやく嘉吉（1441〜44）の年号を読むことができるだけだった。

ある人が、「確かな証拠はない。石に彫られた文字がそれらしく見えない」と語ったとしている。

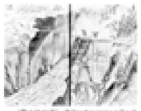
現況

③ 道に迷い、大蛇のいびきを聞く



「案内人が道に迷ったが、山の峰に至ってようやく一安心。案内人のキセルが鳴る音かと思ったが、その音は、ブナの朽ち木から頭を出している大蛇のいびきであった」

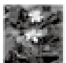
④ 冬に渡った橋を再び渡る



《雪の秋田根》の記述　「十尋（18ｍ）余りの大木を二本渡した上には雪が深くかかり、半ばまで行くと橋が揺れた。雲を踏む思いがして、汗を流しながら、案内人にとりすがった」

⑤ 薬草「ミツバオウレン」を記録する

一茎三葉の葉がヘビイチゴに似て、根が虎耳草（ユキノシタ）に似ている、と記す。ミツバオウレンは、健胃薬として使われる薬草である。八甲田山で採集したのが初めてだった、と真澄は記している。



ミツバオウレン

《雪の秋田根》

⑥ アイヌ語地名を考える

真澄は、笑内（おかしない）の内（ない）は、沢を表すアイヌ語の「ナイ」だとする。

真澄は地名に「ナイ」を聞く度に、蝦夷島で聞き知ったアイヌ語と結び付けて考えている。

釈迦内（しゃかない、大館市、［にえのしがらみ］）
池内（いけない、大館市、［にえのしがらみ］）
毛馬内（けまない、鹿角市、［錦木］）
山内（さんない、五城目町、［ひなの遊び］）

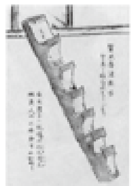
※ 東北に存在する所謂「アイヌ語地名」について、中世以降に成立したアイヌ文化の言語（真澄が蝦夷島で聞いたアイヌ語でもある）に語源を求めるのは、一つの考え方にすぎません。

⑦ 兜神社と鎧神社の伝承を記録する

「藤原泰衡が兜と鎧をそれぞれに納めてから、贄の柵に至ったところで河田次郎に討たれたとも、村人たちが河を流れてきた兜と鎧をそれぞれに収めたとも云う」

⑧ がんぎばしごを描く（旅の知識を活かす）

「田代（能代市二ツ井町）にある家の二階には、雁木梯子があった。アイヌが呼ぶ〈ニキガリ〉、鉱山で言う〈しき（舗）はしご〉と同じであった」



4.《かすむ月星》足跡図と八つの話題

① 築法師（つきほうし、能代市）の地名由来

安倍貞任の子で、乳母に抱かれて藤崎（弘前市近郊）に逃れたとの伝承がある高星。その高星の子とされる「月星」が住んだことが、地名の由来になったのだろうか、と記す。

※高星は、安東氏（安藤氏）の祖とされている。

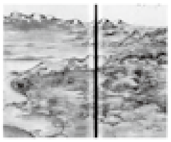
※安倍貞任…平安中期の11世紀、陸奥国一帯に勢力を持っていた安倍頼時の嫡子。前九年の役で、源頼義・義家父子と戦って敗死した。

② 徳昌寺（能代市向能代）で考古資料を描く

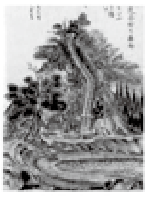
真澄は、現在で言う考古資料にたいへん興味を持っていた。住職が、八森の田んぼから掘り出したと言いながら見せられたものは、真澄が初めて見る形態であったのだろう。

③ 小友沼を描く

「小友沼は、一巡りするとたいへんに大きな沼で、何千町の田んぼに水を引くのであろうか。大友某が造った沼だともいうが、詳しくはわからない。その形は鞆（とも―弓を引くときに左手首に付ける武具）に似ているのもおもしろい。沼の向こうに、新田・中沢・今泉の集落が見える」



④ 達子の薬師堂を描く

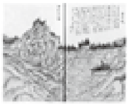


真澄は、達子の薬師堂を詣でた。薬師堂の下には、常楽山梅栄寺という修験が住み、川の近くには大杉があったとして、その様子を描いている。

現況

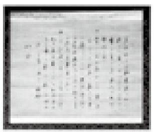
⑤ 浦城の伝承を聞く

真澄は、浦城址の本廓、御座の間、馬出などの場所を案内人から聞き、浦城の伝承を次のように記す。「浦城主の三浦義季は、安東実季に仕えていたが、実季の逆心をいさめて切腹してしまった。その子の義顕は、ある人の讒言で為す術もなく北野の原で討たれた。あるいは、土崎で鉄砲に当たって死んだともされる。その霊魂が悪霊になって人々を困らせたため、一日市に神として祀られている」



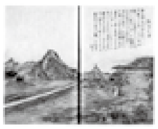
⑥ 天瀬川（三種町）での長寿自慢

「元禄13年（1700）生まれの万助の母が、106歳になって藩主から褒美をもらったが、去年（1805年）亡くなった。それを聞いていた因幡国（鳥取県東部）の修行者が、我が国には183歳と173歳の夫婦がいて、息子夫婦が137歳と131歳、孫夫婦が103歳と99歳…などと自慢した」



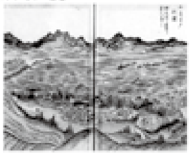
⑦ 鯉川の地名由来を記録する

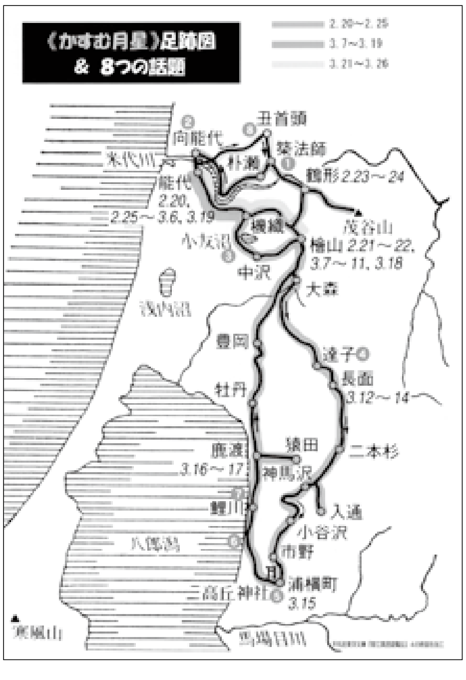
「五百年もの昔、中納言某が流浪されて来たとき、添川から獲った大鯉を料理して差し上げた。すると、その料理をたいへんに気に召された。そのため、これから添川を鯉川に地名を替えるように言われた」



⑧ 牛箇首戸の桃園を見る

「桃の花が一面に咲く牛箇首戸（丑首頭）。集落の手前には耕作前の水田があり、10軒余りの家々は、栗の林に囲まれている」





※文化三年の旅となる《浦の笛滝》第二部・第三部については、本紙では紹介していません。
※足跡図の下図として、平凡社東洋文庫『菅江真澄遊覧記4』の附図を使用しています。
※①〜⑧の白ヌキ番号は、足跡順になっています。足跡図が不鮮明であることをお詫びします。

平成24年 2月4日（土）～3月20日（火・祝日）

菅江真澄が北に向けて旅をした時代は、シベリア開発に伴うロシアの南下政策で、それまで化外の地とされていた蝦夷地が大きく注目され始めた時代でした。そのような時に、真澄は松前に四年間滞在し、その後、下北から津軽、さらに秋田へと旅を続けます。

漂流民送還と通商交渉を目的とした第一回遣日使節のラクスマン来航に関して、真澄は下北での日記に噂話などを記しています。

展示では、日露交渉史における主にラクスマン来航と「文化露寇」の経緯などを紹介しながら、真澄の記録との関わりを紹介しました。さらに、《おがらの滝》に記録された八森出身の吉太郎漂流譚をはじめとして、当時の日本にとっての「異国」に関する真澄の記述を紹介しました。

1. 日露交渉と真澄の記録

ロシアのシベリア開発とは、外貨獲得のために、ラッコや黒テンなどの毛皮獣を狩猟し、また、北方民族から人頭税として毛皮を奪取するのがそのはじまりでした。

しかし、食料などの物資をウラル山脈西側から陸路運ぶのは困難で、シベリアに住んだロシア人は慢性的な食糧不足と野菜不足などによる壊血病で悩まされました。

そこで、シベリアの近くにあり、しかも物資を大量に海路運ぶことができる日本との交易が求められたのです。しかし、当時日本は限られた国（地域）との交易しか認めていませんでした。

ロシアの捕虜となっていたベニョフスキーがシベリアから逃走した際、ロシアによる日本侵略の嘘の警告をもたらし（いわゆる「はんべんごろう事件」）、これを伝え聞いた工藤平助が『赤蝦夷風説考』、林子平が『海国兵談』を著すなどして、蝦夷島は一気に注目を集めることになりました。

その後、神昌丸漂民送還と通商要求を目的にしたラクスマン来航（寛政四年〈一七九二〉）がありました。その噂話などを、真澄は下北での日記《牧の冬枯》《奥の浦々》《牧の朝露》に書き留めています。また、大黒屋光太夫の漂流譚を《かたゐ袋》の断簡部分に書き写すなどしています。

さらに、若宮丸漂民送還と通商要求を目的にした第二回遣日使節レザノフへの対応から、文化三年（一八〇六）と同四年にかけて、「文化露寇」と呼ばれる事件が起こりました。このことに関わる記述を、真澄は秋田での日記《おがらの滝》に書き記しています。

2. ラクスマン来航

真澄の記録に見るラクスマン来航

アダム・ラクスマンの遣日使節団を乗せたロシア船（エカテリーナ号）が蝦夷地に現れた
【目的】
①神昌丸漂流民（光太夫、磯吉、小市）の江戸における送還
②幕府との音信をロシア皇帝エカテリーナ2世が希望していることを伝える

寛政4年（1792）
9月3日　エカテリーナ号、パラサン沖に現れる
　　2日後、根室港に入る
10月6日　松前藩に知らせが届く
10月19日　幕府に知らされる
11月10日　松前藩接待役（藩医加藤周吾、藩士鈴木熊蔵）、根室に着く
11月27日　幕府先遣隊、根室に着く
【根室港氷結のため、エカテリーナ号越冬】
寛政5年（1793）
3月2日　幕府宣諭使（目付石川忠房、西丸目付村上義礼）、南部・津軽の先発部隊とともに松前到着。両藩の後続は4月中に集結
4月2日　小市、根室で死亡
5月7日　エカテリーナ号、根室出港
6月6日　下北半島尻屋崎に漂着
6月9日　箱館に入港
6月20日　ロシア使節団一行、陸路松前に到着
6月21日～27日　日ロ、3回の会談
・光太夫、磯吉の送還を受ける
・ロシア船一艘の長崎入港許可する
6月30日　ロシア使節団、松前出発
7月16日　エカテリーナ号、箱館出港

ラクスマン来航に関する航路図と期日は、『大黒屋光太夫』（山下恒夫著、岩波新書）を参考にした。

真澄の記録
《牧の冬枯》
10月6日　ラクスマン来航の噂話を聞く（松前にて）
10月8日　竹内善右衛門の孫が、ラクスマンと一緒に来たとの噂話を聞く（佐井にて）
《奥の浦々》
6月7日　ラクスマンが松前に行こうとして南部領岩谷に迷い込んだことを聞く（恐山にて）
【エカテリーナ号はエトモ（室蘭）に向かったが、漂着のため、のちに函館に向かうことになった】
《牧の朝露》
7月8日　南部藩士菊池清茂と会い、ラクスマンの件で松前から帰ったことを聞く（大畑近くの鳥沢にて）
9月5日　宣諭使、津軽半島から下北半島の浦々を巡見していることを記す（易国間にて）

《かたゐ袋》雑纂部分

光太夫らがロシア領に漂着し、やがて帰国するまでの記録の一部を、真澄が書き写すなどしている。

3. 文化露寇とその対応

ラクスマン来航に際して幕府が与えた長崎入港許可証（信牌）を持って、文化元年（一八〇四）九月、第二回遣日使節となるレザノフが長崎に来航しました。対応に苦慮した幕府は、長崎に半年も待たせた挙げ句に通商を拒否しました。さらに、国王からの親書、将軍への贈り物の受け取りも拒否しました。この対応に怒ったレザノフは、部下に蝦夷地襲撃の命令を与えます。これによって、文化三年から同四年にかけて、樺太、エトロフ島、利尻島にあったアイヌ交易のための番屋が襲われるなどしました。これは、通商を求めるための脅しでした。驚いた幕府は、弘前藩と盛岡藩に蝦夷地警備の出兵、秋田藩と庄内藩には援軍としての出兵を命じました。

真澄の《おがらの滝》には、秋田藩士出兵のため、街道筋の人々が川舟や馬を準備する様子を、能代と大館で書き留めています。

《久保田の落ち穂》（館蔵）にある真澄の自筆

4. 江戸時代の「異国」と真澄の記録

江戸時代、日本は四つの国（地域）と交易をしていました（これを「四つの口」という）。長崎におけるオランダと中国、対馬藩を通じた朝鮮、それに薩摩藩を通じた琉球です。

一方、眼を北に転ずると、松前藩を通じてアイヌ及びその北方に住む人たちと交易をしていました。蝦夷地（松前周辺を除いた現在の北海道）を異国と見なすかどうかについては、さまざまな考えがあります。確かに、寛政十一年（一七九九）、幕府が東蝦夷地を幕領化してからは、蝦夷地を日本の一部と見なしたと言えます。しかし、徳川家康が、松前慶広に黒印状を与えた時点（一六〇四年、慶長九年）では、松前藩にアイヌとの交易権を認めただけでした。ですから、蝦夷地は誰のものでもなく、ただアイヌの住む土地でした。つまり、異国でも日本でもなく、そもそも国という概念が当てはまらない「化外の土地」だったのです。しかし、ロシアという大国が、シベリア開発のために日本を交易相手にしようとしたため、日本の国家意識が目覚めて、寛政十一年以降、蝦夷地を内国化していったことになります。

真澄が、アイヌあるいは蝦夷地をどう見ていたかについては、感想めいた記述が少ないために、簡単には答えが出せそうもありません。

真澄の記録に見る異国情報としては、ロシアに関するものが多く、あとは若干、朝鮮と琉球に関する記録が見えるだけで、琉球については、書物からの情報が主になっています。

オランダについては、ロシアについて記述する中で若干触れられているだけです。

また、当時の交易国としての中国については記述がほとんどありませんが、長い間、中国は日本のあらゆる分野に影響を及ぼしているために、関係する記述を特定するのが難しくなっています。

真澄の異国情報は、漂流譚などに関する人からの聞き書きや噂、それに、書物からの知識が主となっていると言えます。

5. 漂流にまつわる話題

漂流にまつわる話題

吉太郎（八森新屋敷村出身）の漂流譚

吉太郎が中国で見聞した精米の仕方を図示している。『吉泰郎物語』と呼ばれる漂流譚の書物を見て、真澄が描いたと考えられる。
籠に桶を仕込んで米を搗くため、米粒の跳ね返りがよく、また、桶も傷めずに効率的だとしている。

（母模宇須乃波多）［全集では《白日記》（寛文二）］（大館市立中央図書館蔵）

真澄は、道行く老法師から聞いたとして、船で漂流した吉太郎が5年の後に故郷に帰ったこと（実際は4年余り）、中国で贈られた扇面に書かれた漢詩の内容や中国での逸話などを書き留めている。

（おがらの滝）（館蔵写本）

文化4年（1807）3月27日条

吉太郎が乗った徳永丸の漂流

- 青森大町の儀兵衛を直乗船頭とする百石積船。
- 乗組員5人（うち1人が漂流中に死亡）
- 寛政7年（1795）10月、松前を出港。箱館沖で破船する（帆柱を切る、荷を捨てる）。漂流をはじめる。
- 3ヵ月後の寛政8年正月（日本暦）、ルソン島北端にあるバターン諸島に漂着。
- 帰国当初は、口裏を合わせて、中国に漂着していたことにした。キリシタン詮議を恐れたためであろう。当時、フィリピンは旧教国スペインの植民地だった。
- 寛政10年（1798）12月、長崎に帰着。その後、長崎奉行所による取り調べ。
- 寛政11年12月、吉太郎は秋田藩士に付き添われて、大坂・江戸を通り、故郷に帰る。
- 寛政12年閏4月、故郷を出奔したために人相書が張り出される。故郷を出てはいけないとの禁を犯したため。

和船の海難が多かった理由

① 内航船のために巨大で可動式の舵にしていたため、風波に弱かった。
② 密閉甲板ではなかったため、浸水しやすかった。
③ 多くの船が帆柱一本、帆が一枚であった。幕府の政策を意識した不文律があったとされる。
④ 外航用の羅針盤などを備えていなかった。
⑤ 積み荷が多くなる傾向があった。

寄贈図書

（平成23年2月～平成24年1月）

◆脇本城址懇話会「脇本城址第16号」◆東北芸術工科大学東北文化研究センター「季刊東北学第26・27・28号」「まんだら第46・47・48号」「真澄学第6号」◆秋田県文化財保護協会「出羽路第148号」◆田口昌樹「雪国民俗第35号」「いわな第137・138・139・140・141号」「あきた浪漫第25・26・27・28号」◆錦仁「なぜ和歌を詠むのか」◆菊池勇夫「菅江真澄が見たアイヌ文化」◆奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学コース「叙説第38号」◆加藤愼一郎「羽州金沢古柵の人伊藤直純」◆男鹿市菅江真澄研究会「男鹿五風（会誌第17号）」「菅江真澄と地震講演と学習の会」◆藤田守「古碑景艸之二・五城目町」「古碑景艸之三・八郎潟町①」◆菅江真澄研究会「菅江真澄研究第73・74・75号」◆福岡龍太郎「菅江真澄の見た森吉（上）・（下）」「秋田山考」◆岩田計子「菅江真澄遊覧記1～5・随筆集」「菅江真澄全集第1～12巻・別巻1」「菅江真澄と秋田」「菅江真澄未刊文献集1・2」「なぜ真澄は北を旅したか」「菅江真澄研究―菅江真澄翁170年祭記念号―」◆株式会社企画集団ぷりずむ「白神学第2巻」◆長野市立博物館「道が人をつなぐ―北国街道の400年―」◆泉明「年表でみる船川港のあゆみ」◆吉川弘文館「知っておきたい日本の年中行事事典」　他

※寄贈図書は、スタディルームで御覧いただけます。

企画コーナー展の展示スペースでは、コーナー展の合間に「収蔵資料の紹介」を行い、新たな展示の仕方を試みるなどしながら、真澄の著作をさまざまな視点から紹介しています。

描かれた樹木

展示パネルでは実際に樹木がある場所を明示し、いくつかの樹木については実景写真も併せて紹介しました。

真澄の図絵に見る「文化財」（国指定と県指定）

右写真は、《雪の出羽路平鹿郡十一》に描かれた「荒処の沼入り梵天行事」（横手市）です。記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（国）と無形文化財（県）に同時に指定されています。展示資料は、館蔵の写本（通称・県庁本）です。

表紙解説

図絵は《雪の秋田根》（館蔵写本）、写真は企画コーナー展「真澄、県北の旅」

真澄は《雪の秋田根》に、中世の比内を領した浅利氏について、次のような伝承を書き記している。「浅利氏は甲斐国の出自であるが、津軽から比内に移り、独鈷村を本拠とした。浅利勝頼とその子頼平は、安東実季と何度も戦ってうち負かしていた。しかし、豊臣秀吉から、今後いくさをしないようにとの裁定があった。実季はおもしろくなかった。実季が扇田城に勝頼を訪ねて盃を交わしていたところ、かつて安東家に仕えていたことのある生内権介という者が、突然に勝頼に斬りかかった。浅利の家来たちは為すすべもなく、権介は逃げた。それを頼平とその子の頼広が追っていき、尾組内というところで、ようやく権介を討ち取ったのである。勝頼の傷は癒えたが、度重なる戦いで、合戦中に亡くなってしまった。安東実季と再び戦って比内を攻め取った頼平は、再び秀吉から所領を安堵されたが、甲斐国以来の家来の子孫である杉沢・片山・佐藤から毒を盛られてしまい、大坂で亡くなったと伝えられている。その浅利家に伝わったと思われる琵琶がある。今ではこわれてしまったが、昔を偲ばせるように照り輝いている。そして、浅利の琵琶を図示して、次の歌を詠んだ。「むかし誰が手に馴しけん四の緒にしらべかへたる松風のこゑ」。現在、大館市比内町・大日神社に残るその琵琶の内側には真澄自筆短冊の断片が貼られており、「浅利家の調度とて大日堂に納めてこぼれたる琵琶なむ有けるを見て」の詞書と、わずかに初句の「む」、第三句の「しら」の文字だけが残る。

編集後記

・今年度の後半は、にわかランナーのように走ったり休んだりしながらラクスマン来航について調べてきた。真澄をめぐる学びとは言え、資料集や専門書が必要な時もある。気まぐれな使用だから、自然、自分で買い求める。そこからようやくしぼり出される解説文もある。博物館の仕事とは、時間と労力、それにいくらかの身銭だとの覚悟もわずかばかりの経験もあるが、何年経っても年度末は「あんべいいがァ」の自問が続く。一階出入口の一本の白梅。当館に春を告げるその一輪だけを待っている。（松山）

真澄 MASUMI No.29

発行日　平成24年3月23日
編集・発行　秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳥崎字後山52
TEL. 018-873-4121（代）